

官学連携によるインターンシップによる地方創生の試み(2) -埼玉県秩父郡皆野町を事例に-

○横山滉人(早稲田大学人間科学部)・坂倉剛(早稲田大学大学院人間科学研究科)
・中島直輝(埼玉県庁・早稲田大学人間総合研究センター)
・黒澤栄則(皆野町役場・早稲田大学人間総合研究センター)
・扇原淳(早稲田大学人間科学学術院)・浅田匡(早稲田大学人間科学学術院)

Keyword: 官学連携、インターンシップ、地方創生

【背景】

学生はインターンシップに取り組む事により、大学での学びを社会での実践に生かす事ができる。学生はインターンシップを通して大学での学びを深化・実用化する事ができると同時に、自身の学びの意欲を喚起する事ができる。さらに、数日間に渡る現場での社会経験を通して自身の職業適性の自覚や、将来設計の具体化をする事が期待できる。

また、インターンシップにて学生が自身の専門性を活かした取り組みをする事は、学生自身の学びに繋がるだけではなく、大学での学びを社会に直接的に還元する行為でもある。つまり、学生の積極的なインターンシップへの参加は、学生自身にとっても、インターンシップ先にとっても利益がある取り組みなのである。よって、大学と地方公共団体が官学連携を行い、学生を積極的に地方でのインターンシップに参加させる事は、学生の学びを促すという点と地方創生を活性化させるという点の二つの観点から意義深いと言う事ができる。

早稲田大学人間科学学術院は、埼玉県北西部に位置する皆野町と2019年に包括連携協定を結び、インターンシップに関する覚書を締結した。2020年3月には第一回となる皆野町地方創生インターンシップ事業を実施し、2名の学生を皆野町に派遣し、11日間のインターンシップ事業を皆野町役場で実施している。

以上を踏まえて本稿では、皆野町地方創生インターンシップ事業に参加した学生である筆者の活動報告に加えて、本事業の今後の課題について検討する。

【インターンシップ内容】

皆野町地域創生インターンシップ事業は2020年3月4日～3月18日(平日の11日間)の期間に実施した。学生は皆野町役場のみらい創造課にて、①新聞記事の切り抜きとまとめ(皆野町を含む秩父地域、埼玉県や国の地域振興に関する記事を収集)、②広報紙編集会議への参加(「広報みな」の構成・記事の検討)、③町内の視察(自動車を使い、町役場の職員が説明や質問への応答をしながら実施)、④地域振興に関する立案(広報紙の改善案・町のプロモ-

ーション方法の提案・お試し居住用住宅「来てみ～な」の利用促進の提案)、⑤ホームページの記事作成(記事掲載の提案書の作成、記事の作成)、⑥中学校訪問(皆野町立皆野中学校にて校長先生と対談)、⑦議会傍聴(皆野町議会第1回定例会、予算審議、埼玉県議会予算特別委員会など)、⑧課題研究とその発表(皆野町の課題とその解決方法について、学生が各自のテーマで調査を行い、最終日に発表)、を行なった。

上記⑧の「課題研究とその発表」では、2名の学生がそれぞれ「公共交通の活性化」と「埼玉県皆野高等学校の活性化」という課題を与えられた。本稿では、後者の課題に取り組んだ筆者の研究課題の成果の報告を重点的に行う。

【皆野高等学校の活性化について】

埼玉県立皆野高等学校は1966年に開校した秩父東高等学校皆野分校商業科が1968年に分離し独立し現在に至る商業高等学校である。学科は商業科と情報処理科が存在するが、入試では二つをまとめた「商業系」としてのくくり募集をしており、学科が二つに別れるのは3年次のみとなっている。平成25年からは志願者数の定員割れが続いており、年々人気は低下している傾向がある。図1は過去9年分の皆野高等学校の受験者数の変遷をまとめたものである。

年度	募集人員	入学許可 予定者数	受検者数	倍率
平成24年	120	119	130	1.09
平成25年	120	119	89	0.75
平成26年	120	119	65	0.55
平成27年	120	119	42	0.35
平成28年	120	119	37	0.31
平成29年	120	119	41	0.34
平成30年	120	119	37	0.31
平成31年	80	79	34	0.43
令和2年	80	79	18	0.23

図1: 皆野高等学校の過去9年分の志願倍率
(高校入試ドットネットより引用して作成)

このような状況を踏まえて、皆野高等学校の志願者数を上昇させる方略を考察し、提案をする事が筆者に与えられた本インターンシップでの研究課題であった。

尚、皆野町には高等学校が一つ、中学校が一つ、小学校が三つ存在している。その中の皆野中学校には、インターンシップ期間中に一度学校訪問し、校長先生と対談を行なった。その際、①皆野中学校はフィールドワークにて観光地にいる外国人との交流を積極的に活用した英語の学習を行なっているという話と、②皆野町の町内では学校の職員は学校の隔てなく交流があるという話の二つを校長先生から伺った。この時、この二つに着目をして、皆野中学校のフィールドワークのノウハウを生かして、皆野高等学校でも英語を活用した学習プログラムを作成することが活性化に有効ではないかという仮説を立てた。

【皆野高等学校の現状の分析】

まず、インターネットを活用して埼玉県全体の志願状況について図表を用いて数値的な分析を行なった(図2・3)。図2より、皆野高等学校が属している商業科は工業科・農業科・総合科と偏差値や志願者数で似通った傾向がある事が読み取れた。よって、図3では商業科と農業科と工業科と総合科の4学科の、各学科の偏差値とその偏差値の学科への志願者数の関係を棒グラフでまとめた。尚、図2・3のグラフを作成するための用いた偏差値のデータは「高校受験ネット」と言うホームページから引用した。「高校受験ネット」に記載されている偏差値は、偏差値としての信頼性の検証はできていない。しかし、「中学生が高校選びの時に参考にしていく数値の一つ」としては十分信頼できる数値だと判断し、使用することとした。図3では、商業科の軸が一番右に偏っている事が確認できる。特に、商業科と農業科と工業科の3つだけで比較すると、その差がとてもよく確認できる。このことより、埼玉県内において商業科は、農業科や工業科よりも高い人気があるという事が読み取れる。つまり、皆野高等学校の魅力化を検討する上で、皆野高等学校が「商業科」だという点は魅力の一つとしてカウントする事ができると言える。

学科名	設置数	偏差値	募集人員	入学許可 予定者数	志願 確定者数	倍率
普通科	109	55.2	(182)27,340	27158	31211	1.15
工業科	49	44.0	(19) 2,640	2621	2672	1.02
商業科	30	46.9	(15) 2,580	2565	2603	1.01
農業科	18	42.1	(6) 840	834	827	0.99
総合科	9	45.4	(14) 1,760	1746	1840	1.05
外国語科	8	60.4	(1)360	359	457	1.27
家庭科	8	47.1	320	319	281	0.88
理数科	7	66.5	280	280	448	1.60

図2：2020年度の埼玉県の公立高校の各学科の基本情報

(偏差値以外は埼玉県教育委員会より、
偏差値は「高校受験ネット」より引用して作成)
(設置数上位8学科のみ掲載)

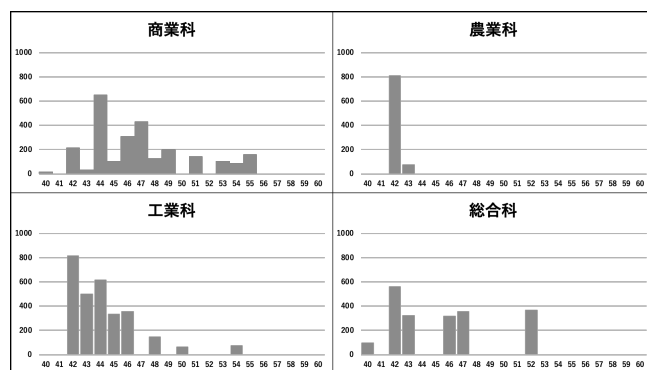


図3：埼玉県の公立高校の学科ごとの偏差値と志願者数

(偏差値以外は埼玉県教育委員会より、
偏差値は「高校受験ネット」より引用して作成)
(横軸は偏差値、縦軸は志願者数)

次に、インターネットの活用や様々な人達への聞き込みを通して、皆野高等学校の過去の取り組みや、教育の特色、現状の良い点と良くない点について調査を行なった。皆野高等学校の良い点としては、①ビジネス社会の即戦力を育成しており、ゼロから商品を作り出し販売するところまで自分達で実施していて、特に「イノシカバーガー」は埼玉県高等学校生徒商業研究発表大会で最優秀賞を取るほどの成功を収めている、②小学生との「ふれあい体験」や職業体験、地域貢献などを積極的に地域と連携した活動を実施している、という2点が挙げられた。それに対し良くない点は①定員割れという事もあり、商業や地域貢献に全く興味がない生徒が比較的多く存在する、②簿記などの資格取得実績が伸び悩んでいる、③駅から徒歩30分かかるが、バスは1日で往復合計30本程度しかない、④近隣にある埼玉県立秩父農工科学高等学校に偏差値で劣る為に人気も

劣り志願者数が集まりにくい、の4点が挙げられた（「高校受験ネット」によると皆野高等学校の偏差値が40、秩父農工科学高等学校の偏差値が42）。確かに2つ挙げた良い点を魅力に感じて皆野高等学校への進学を決める生徒も多少は存在するのだが、4つ挙げた良くない点を理由にその数が伸び悩んでいるのが現状であった。

【皆野高等学校の魅力化の提案】

以上の分析を踏まえると、皆野高等学校の現時点での魅力は「商業科」と「地域連携」である。それに対し現状で達成したい課題は「偏差値や教育プログラムの人気で秩父農工科学高等学校よりも上を行き、志願者数を上げる事」である。この事と、最初に述べた「皆野中学校の英語学習のフィールドワークのノウハウを活用した学習プログラムを作るのが効果的」という仮説を組み合わせ、「商業科」と「地域連携」と「英語」の3つの要素を組み合わせた提案をする事とした。具体的には、皆野町（もしくは秩父地域）の名産品を活用した商品を開発し、それを世界に向けて発信する事を目標とした学習プログラムの提案である。

本プログラムの達成の為にはまず皆野高等学校の生徒達は「外国人への商品の売り込み方を学ぶ」必要があり、その為に①生徒自身が皆野町の魅力を知り、②情報発信の方法を学び、③外国人と対面した時の話し方を学ぶ、という3つのステップを踏む必要がある。①の皆野町の魅力を知る段階では、皆野町の魅力を勉強すると同時にそれらを英語で表現する方法を学ぶ事となる。②の情報発信の方法を学ぶについては、情報処理科における問題解決型学習が活用できる。③の外国人と対話した時の話し方については、「伝える」という点に重点をおく。話す・書く能力だけに頼るのではなく、「伝える」事をサポートする為のソフトを開発して活用したり、自分たちでデザインしたチラシを活用したり、様々な工夫をするのが望ましい。

「外国人への商品の売り込み方学ぶ」ことに合わせて、実際に海外に向けた発信を進めていく必要がある。しかし、いきなり海外への発信は難しいので、①秩父地域への発信、②外国人観光客への発信、③海外への発信、の順に範囲を広げて行くのが望ましい。①はイノシカバーガーでした事と同じであり、既に皆野高等学校ができていた事である。②は皆野中学校の実践のノウハウを生かして実施する事が望ましいと考えられる。③については少し難易度が高いように思えるが、官学連携を活用すれば十分実現可能であると考えられる。詳細については後に記載する。

また、以上に加えて本学習プログラムには重要なポイント

が4つある。①皆野・秩父の伝統を大切に、「皆野だから」という付加価値を生み出す事、②新商品の開発を移住したい町づくりに繋げて、皆野町の人にとってもプラスになるようにする、③皆野町全体で応援・サポートできるようにして「街全体が学校」という状態を目指す、④1年間の取り組みで終わるのではなく、次の学年に引き継いでいけるシステムを構築する、という4つのポイントを押さえると、皆野町全体を盛り上げながら、皆野高等学校も活性化できる事と考えられる。

【官学連携でできる事】

以上で述べた提案に加えて、早稲田大学との官学連携をだからこその事が主に3つある。①早稲田大学のキャンパス祭への招待、②早稲田大学の学生との交流学习、③早稲田大学の海外でのプロジェクト科目への招待、の3つなら実現可能性は十分高いと考えられる。①のキャンパス祭への招待では、大学生と一緒に店舗の出店の経験をする事ができる。商業科として販売の能力を培うだけでなく、大学生と一緒に自分たちで考えて運営するという経験を通して協調性・デザイン力・多様性・リテラシーなど、普段の高校生活では得られない能力を大学生との連携の中から得る事が可能となる。②は大学側が教育の研究に携わっている人がいないと実現が難しいが、本官学連携事業においては、早稲田大学の教育工学を研究するゼミも携わっている為、双方にとって利益のある交流学习を実現する事が可能である。③については、現在早稲田大学はタイの経営大学と連携したプロジェクト科目を進行しており、そのプロジェクト科目に高校生を招待することも十分可能である。しかし、強い人数制限がかかる可能性が高いので、大々的に実施する事は難しいと考えられる。

以上の内容をまとめると、「商業科」と「地域連携」という魅力に「英語」という魅力を付加して、大学との連携を活用しながら地元の名産品の売り込みを世界に広げる事によって、地域全体を巻き込みながら高校を活性化させる事ができるという提案である。尚、ここでいう「英語」とは英検などのスコアにこだわるのではなく、実践で伝わるように使う事に重点をおいたものである。

【インターンシップを終えて】

本稿では本インターンシップの最終課題である課題研究の報告に重点をおいた。しかし、本インターンシップを通して筆者自身が学んだことや思考に与えた変化もとても意義深かったと考えられる。本インターンシップではありが

たい事に、普段できないような経験を沢山準備していただけた為、様々な知識やスキルを身につける事ができた。その中でも本インターンの構造だからこその学びや、官学連携での実施だからこその学びに重点をおいて、筆者が学んだ事を最後に報告する。

まず、町を運営している重役の人と話す機会をたくさん準備してもらえた事や、実際に現場で仕事をする事によって感じ取れるプロのスピード感や水準の高さなど、現場の大人と一緒にいる事によって得られる学びは大学では得られないものだった。筆者の所属する早稲田大学人間科学部は他の学部と比較して、デザイン力を求められる機会が非常に多い。学際的・多角的な視点から新しい案をデザインして提出する課題はよくあるのだが、大学の課題では「現場の人達が一度も考えた事がない発想か」という視点が無く、さらに「時間制限」もない事がほとんどである。つまり、大学の課題と同じ要領で実施しても、「時間がかかった割に新しい案が生み出せなかった」という結果になる確率が高いのである。つまり、インターン先の職員達に新しい案を提供できるようにする為には、大学で学ぶデザイン力の水準を底上げし、さらに要領よく限られた時間で課題を実施しなくてはいけなくなるのである。そのような中で、様々なアイデア出しの経験をした事はとても意義深い学びになった。

次に、たくさんの人と話す事を重ねる事によって、「人と人との繋がり」の重要性を体感できるという点である。筆者は皆野町インターンシップしか経験がないため、他の市町村との比較ができないのだが、皆野町の職員達は人と人との繋がりが充実しているように見えた。それだけでなく、本インターンシップの課題研究では、何も無いところから自分で考えて必要な情報を集めてくる必要があった為、自分から積極的に様々な人達と話をする機会を作っていけなかった。さらに積極的に様々な場所に足を運び、出会った人に話しかける必要もあった。つまり、構造上「人と人との繋がり」の重要性への気付きとそれを主体的に生み出す実践力が身に付くようになっていたのである。

尚、本稿で述べた「皆野高校をよくするための提案」は大規模に人を巻き込むような案も含まれており、理想論のように感じ取る人いると考えられる。少なくとも本インターンシップに参加する前の筆者であればそのように感じていたはずである。しかし、11日間のインターンシップで多くの人と話し合う機会を通じて、「皆野町の連携能力ならできだろう」と判断した案のみを述べたという事を最後に指摘しておく。

【今後の展開】

本稿で述べた案については、現在皆野町役場で事業化に向けて前向きに話を進めている状態にある。最終的に本インターンシップは、官学連携事業として双方に利のある形で終える事が出来たと考えられる。今後は、本稿で述べたような学生の学びの経験を、大学のカリキュラムの中にどのように位置づけ、専門科目やキャリア教育という点にどのようにつなげるかという検討が必要である。また、大学での研究との有機的な連携と出口保証の観点からもより深い検討が求められる。

【参考文献】

- ・高校入試ドットネット(2020), 埼玉県立皆野高等学校, <https://saitama.koukounyushi.net/highschool/northern/143minano/>(2020年3月17日閲覧)
- ・みんなの高校情報(2020), 埼玉県 高校偏差値一覧2020年度版, <https://www.minkou.jp/hischool/exam/saitama/deviation/?c=3>(2020年3月17日閲覧)
- ・埼玉県教育委員会(2020), 令和2年度埼玉県公立高等学校入学者選抜志願確定者数, <https://www.pref.saitama.lg.jp/f2208/r2nyuushi-jouhou.html>(2020年3月17日閲覧)